2 学期始業式

皆さん、おはようございます。

先週までの文化祭・体育祭、お疲れさまでした。一人ひとりが自分の役割を果たし、みんなで作り上げた文化祭・体育祭だったと思います。体育祭の閉会式に全員で歌った校歌は久しぶりに声を上げての歌唱となりました。皆さんが大きい声で校歌を歌う姿は本当にすばらしい光景でした。

皆さんは学校祭で、いろいろな部門で競い合い、最終的に青組が総合優勝しました。歓声を上げる青組と悔しそうに落胆する他の色の皆さん。その中には青組に向けて賞賛の拍手をしている人もいて、まさにノーサイドだなあと感心しました。

競争するというのは、成果を上げるためには大変効果的です。ライバルがいてこそ、頑張れるということがあります。あの人には負けたくない。あのチームに勝ちたいと思って、頑張ると自分の力も大いに伸びます。先日のバスケットボールワールドカップ　ベネズエラ戦での逆転なども勝ちたい一心が功を奏したのだと思います。

熱くなればなるほど、負けたときは悔しいものですが、試合が終了すれば、敵と味方、勝者と敗者の区別はなくなり、お互いの健闘を讃えようという考え方は大事だなあと思います。

さて、この夏もスポーツの世界では、いろいろな名勝負がありましたが、高校野球全国大会決勝慶応高校対仙台育英高校の試合もその一つです。私はその決勝の二日後に準優勝となった仙台育英高校の須江航監督のお話を聞くことができました。そこで聞いてきたことを皆さんにお話ししたいと思います。

須江監督は埼玉県出身で小学校から野球を始めたそうですが、プレーヤーとしては活躍できませんでした。強豪校へ行きたくて埼玉県から県を越えて仙台育英高校へ進学したのですが、2 日で来るところを間違えたと悟りました。結局、高校では学生コーチを務め、大学でもマネージャー、コーチをしていました。そして、縁あって中学校の野球部の監督に就任し、そこから頑張ってこられたそうです。

今回、準優勝に終わりましたが、監督は日ごろから「人生は敗者復活戦」を座右の銘にしていて、「負けたときに人間の価値が出る。グッドルーザーであれ」と初戦の時から言っており、負けたことをいい経験をしたと話す姿がとても印象的でした。

須江監督の指導はとことん生徒とコミュニケーションを取ることだそうで、伝わる言葉を探しています。例えば、人は否定形を実現できない。「〇〇するな」「〇〇しないように」という否定的な指示はなかなか実現できません。肯定的な発想を促します。例えば、スキー、スノーボードで林の中を滑る。「木にぶつかるな」と言っても、選手は木にぶつかってしまう。「よくごらん。抜けられる道が見えてくるだろ」「コースが見えたぞ」というふうに林を見ると道が見えてくるそうです。皆さんも否定形ではなく肯定形でものを考えるといろんなことができるようになるということです。

人生、順風満帆な時ばかりではありません。うまくいかないときや挫折することもあるでしょう。その時、自己肯定感を下げないように対処することが大事です。そのためには情熱と素直さと粘り強さが大切です。まず自分はこのことが好きだという情熱を持っていれば、困難も乗り越えられます。次に素直さとは柔軟性があること、意見が違うことを面白いと思えること。ドラマガリレオで主演した福山雅治の言葉ですが、「実に面白い」と捉えてみましょう。

そして粘り強さ。求めるのは瞬発力ではなくて持久力。結果が見えるまでやりきる力が大事です。現代は情報が多すぎて、いろいろ目移りしてしまうことも多いです。少しぐらいできるようになっても慢心しないこと。いつでもできる、その力を出したいときにできるようになるまで、粘り強く続けることが大事だということでした。

2学期が始まります。1年の中でも最も充実すべき期間です。学校祭を終えて、みんなが改めてスタートする日に当たり、競い合ってモチベーションを高めること、常に前を向いて、今自分にできることを求めていくことを伝えました。